

編集後記

青木孝夫

一年一年、四回の例会、一つの大会、一冊の年報を積み重ねて広島芸術学会も、第十六号の年報を送り出す。投稿者のみなさんとはより、事務連絡、印刷等、多くの方の協力があればこそ、年報の発行も順調に号を重ねてくることができたのである。当然のこととはいえ、更めて関係各位に感謝したい。今回は、八本の論文と研究ノートを一冊、収載することができた。

こここのところ、投稿論文が増える傾向にあり、内容も多彩になっている。今回も、投稿論文に応じた査読者を決するにあたり、編集委員の枠を越えて適切な方に依頼するなど、レフリー制をより妥当なものに、またより実質的なものにしよと改善に努めてきた。まだまだ改良の余地はあろうが、格別の近道はない。堅実な営みを継続するのみである。

年報の名称は「藝術研究」であり、当学会の名称は「広島芸術学会」である。双方で異なった藝・芸の字を用いているが、藝と藝は、本来、略字と正字の関係ではなく、別の字である。戦後日本では同じ意味として使用しようとしているが、「芸」は、訓読みすればクサ

ギル、音読みではウン。クサギルは草を切りあるいは刈ること、芸は本来刈り取られた香りよい薬草を指す。中国では、蔵書の維持に、芸草また芸香草という除虫効果のあるハーブを用いる。それもあつてであろう、日本最初の公開図書館の名称は「芸亭」である。一方、藝の字は、園藝の熟語にも示唆されるように植物を植えて育てることをいう。共に植物に関わりながら、一方は刈り取りに、他方は育成に関わる。我々の営みも、農作物を育てる農耕と同じように、普段に耕作して、刈り入れの収穫の秋を待つものである。

市民に開かれつつ、研究者と作家が交流するという当学会の趣旨が、学問の、また創作の、そして人の生きる思いを支える種子となつて、普及せんことを。毎年、種を蒔き、育成し、そして収穫する。その営みを繰り返して、有形無形のうちに形成・継続されていくものを大切にしたいと思う。

次号でも、年報の一層の充実を期するつもりです。研究論文や書評に「研究ノート」の枠を加え、会員のみなさんの新鮮な知的捻りを収穫すべく、投稿をお待ちしています。

(あおき・たかお 広島大学)